氷河鼠の毛皮

宮沢賢治

このおはなしは、ずゐぶん北の方の寒いところからきれぎれに風に吹きとばされて来たのです。氷がひとでや海月（くらげ）やさまざまのお菓子の形をしてゐる位寒い北の方から飛ばされてやつて来たのです。

十二月の二十六日の夜八時ベーリング行の列車に乗つてイーハトヴを発（た）つた人たちが、どんな眼（め）にあつたかきつとどなたも知りたいでせう。これはそのおはなしです。

×

ぜんたい十二月の二十六日はイーハトヴはひどい吹雪でした。町の空や通りはまるつきり白だか水色だか変にばさ〳〵した雪の粉でいつぱい、風はひつきりなしに電線や枯れたポプラを鳴らし、鴉(からす)なども半分凍つたやうになつてふら〳〵と空を流されて行きました。たゞ、まあ、その中から馬そりの鈴のチリンチリン鳴る音が、やつと聞えるのでやつぱり誰(たれ)か通つてゐるなといふことがわかるのでした。

ところがそんなひどい吹雪でも夜の八時になつて停車場に行つて見ますと暖炉の火は愉快に赤く燃えあがり、ベーリング行の最大急行に乗る人たちはもうその

前にまつ黒に立つてゐました。

何せ北極のぢき近くまで行くのですからみんなはすつかり用意してゐました。着物はまるで厚い壁のくらゐ着込み、馬油を塗つた長靴（ながぐつ）をはきトランクにまで寒さでひびが入らないやうに馬油を塗つてみんなほう〱してゐました。

汽罐車（きくわんしや）はもうすつかり支度ができて暖さうな湯気を吐き、客車にはみな明るく電燈がともり、赤いカーテンもおろされて、プラツトホームにまつすぐにならびました。

『ベーリング行、午後八時発車、ベーリング行。』一人

の駅夫が高く叫びながら待合室に入つて来ました。すぐ改札のベルが鳴りみんなはわい〳〵切符を切つて貰（もら）つてトランクや袋を車の中にかつぎ込みました。

間もなくパリパリ呼子が鳴り汽罐車は一つポーとほえて、汽車は一目散に飛び出しました。何せベーリング行の最大急行ですから実にはやいもんです。見る間にそのおしまひの二つの赤い火が灰いろの夜のふゞきの中に消えてしまひました。こゝまではたしかに私も知つてゐます。

×

列車がイーハトヴの停車場をはなれて荷物が棚（たな）や腰掛の下に片附き、席がすつかりきまりますとみんなはまづつくづくと同じ車の人たちの顔つきを見まはしました。

一つの車には十五人ばかりの旅客が乗つてゐましたがそのまん中には顔の赤い肥（ふと）つた紳士がどつしりと腰掛けてゐました。その人は毛皮を一杯に着込んで、二人前の席をとり、アラスカ金の大きな指環（ゆびわ）をはめ、十連発のぴかぴかする素敵な鉄砲を持つていかにも元気さう、声もきつとよほどがらがらしてゐるにちがひな

いと思はれたのです。
近くにはやつぱり似たやうななりの紳士たちがめいめい眼鏡（めがね）を外したり時計を見たりしてゐました。どの人も大へん立派でしたがまん中の人にくらべては少し痩（やせ）てゐました。向ふの隅（すみ）には痩た赤ひげの人が北極狐（ほくきよくぎつね）のやうにきよとんとすまして腰を掛けこちらの斜（はす）かひの窓のそばにはかたい帆布（はんぷ）の上着を着て愉快さうに自分にだけ聞えるやうな微（かす）かな口笛を吹いてゐる若い船乗りらしい男が乗つてゐました。そのほか痩て眉（まゆ）も深く刻み陰気な顔を外套（ぐわいたう）のえりに埋てゐる人さつぱり何でもないといふやうにもう睡（ねむ）りはじめた商

人風の人など三四人居(を)りました。

×

汽車は時々素通りする停車場の踏切でがたつと横にゆれながら一生けん命ふゞきの中をかけました。しかしその吹雪もだん〳〵をさまつたのかそれとも汽車が吹雪の地方を越したのか、まもなくみんなは外の方から空気に圧(お)しつけられるやうな気がし、もう外では雪が降つてゐないといふやうに思ひました。黄いろな帆布の青年は立つて自分の窓のカーテンを上げました。

そのカーテンのうしろには湯気の凍り付いたぎらぎらの窓ガラスでした。たしかにその窓ガラスは変に青く光つてゐたのです。船乗りの青年はポケツトから小さなナイフを出してその窓の羊歯(しだ)の葉の形をした氷をガリガリ削り落しました。

　削り取られた分の窓ガラスはつめたくて実によく透とほり向ふでは山脈の雪が耿々(かうかう)とひかり、その上の鉄いろをしたつめたい空にはまるでたつたいまみがきをかけたやうな青い月がすきつとかゝつてゐました。

　野原の雪は青じろく見え煙の影は夢のやうにかけたのです。唐檜(たうひ)やとゞ松がまつ黒に立つてちらちら窓を

過ぎて行きます。じつと外を見てゐる若者の唇（くちびる）は笑ふやうに又泣くやうにかすかにうごきました。それは何か月に話し掛けてゐるかとも思はれたのです。みんなもしんとして何か考へ込んでゐました。まん中の立派な紳士もまた鉄砲を手に持つて何か考へてゐます。けれども俄（にはか）に紳士は立ちあがりました。鉄砲を大切に棚（たな）に載せました。それから大きな声で向ふの役人らしい葉巻をくはへてゐる紳士に話し掛けました。

『何せ向ふは寒いだらうね。』

向ふの紳士が答へました。

『いや、それはもう当然です。いくら寒いと云つても

こつちのは相対的ですがなあ、あつちはもう絶対です。寒さがちがひます。』

『あなたは何べん行つたね。』

『私は今度二遍目ですが。』

『どうだらう、わしの防寒の設備は大丈夫だらうか。』

『どれ位ご支度なさいました。』

『さあ、まあイーハトヴの冬の着物の上に、ラツコ裏の内外套（うちぐわいたう）ね、海狸（びばあ）の中外套ね、黒狐（くろぎつね）表裏の外外套ね。』

『大丈夫でせう、ずゐぶんいゝお支度です。』

『さうだらうか、それから北極兄弟商会パテントの緩慢燃焼外套ね……。』

『大丈夫です』
『それから氷河鼠の頸のとこの毛皮だけでこさへた上着ね。』
『大丈夫です。しかし氷河鼠の頸のとこの毛皮はぜい沢ですな。』
『四百五十疋分だ。どうだらう。こんなことで大丈夫だらうか。』
『大丈夫です。』
『わしはね、主に黒狐をとつて来るつもりなんだ。黒狐の毛皮九百枚持つて来てみせるといふかけをしたんだ。』

『さうですか。えらいですな。』

『どうだ。祝盃を一杯やらうか。』紳士はステームでだんだん暖まつて来たらしく外套を脱ぎながらウヱスキーの瓶を出しました。

　すぢ向ひではさつきの青年が額をつめたいガラスにあてるばかりにして月とオリオンとの空をじつとながめ、向ふ隅ではあの痩た赤髯の男が眼をきよろきよろさせてみんなの話を聞きすまし、酒を呑み出した紳士のまはりの人たちは少し羨ましさうにこの豪勢な北極近くまで猟に出かける暢気な大将を見てゐました。

×

毛皮外套をあんまり沢山もつた紳士はもうひとりの外套を沢山もつた紳士と喧嘩（けんくわ）をしましたがそのあとの方の人はたうとう負て寝たふりをしてしまひました。

紳士はそこでつゞけさまにウヰスキーの小さなコツプを十二ばかりやりましたらすつかり酔ひがまはつてもう目を細くして唇（くちびる）をなめながらそこら中の人に見あたり次第くだを巻きはじめました。

『ね、おい、氷河鼠の頸のところの毛皮だけだぜ。えゝ、氷河鼠の上等さ。君、君、百十六疋の分なんだ。君、

君斯う見渡すといふと外套二枚ぐらゐのお方もずゐぶんあるやうだが外套二枚ぢやだめだねえ、君は三枚だからいいね、けれども、君、君、君のその外套は全体それは毛ぢやないよ。君はさつきモロツコ狐だとか云つたねえ。どうしてどうしてちやんとわかるよ。それはほんとの毛ぢやないよ。ほんとの毛皮ぢやないんだよ』

『失敬なことを云ふな。失敬な』

『いゝや、ほんとのことを云ふがね、たしかにそれはにせものだ。絹糸で拵へたんだ』

『失敬なやつだ。君はそれでも紳士かい』

『いゝよ。僕は紳士でもせり売屋でも何でもいゝ。君のその毛皮はにせものだ』

『野蕃（やばん）なやつだ。実に野蕃だ』

『いゝよ。おこるなよ向ふへ行つて寒かつたら僕のとこへおいで』

『頼まない』

よその紳士はすつかりぶり〳〵してそれでもきまり悪さうにやはりうつ〳〵寝たふりをしました。

氷河鼠（ひょうがねずみ）の上着を有（も）つた大将は脣（くちびる）をなめながらまはりを見まはした。

『君、おい君、その窓のところのお若いの。失敬だが

君は船乗りかね』

若者はやつぱり外を見てゐました。月の下にはまつ白な蛋白石（たんぱくせき）のやうな雲の塊が走つて来るのです。

『おい、君、何と云つても向ふは寒い、その帆布一枚ぢやとてもやり切れたもんぢやない。けれども君はなか〱豪儀なとこがある。よろしい貸てやらう。僕のを一枚貸てやらう。さうしよう』

けれども若者はそんな言（げん）が耳にも入らないといふやうでした。つめたく唇を結んでまるでオリオン座のとこの鋼いろの空の向ふを見透かすやうな眼をして外を見てゐました。

『ふん。バースレーかね。黒狐だよ。なかなか寒いからね、おい、君若いお方、失敬だが外套を一枚お貸申すとしようぢやないか。黄いろの帆布一枚ぢやどうしてどうして零下の四十度を防ぐもなにもできやしない。黒狐だから。おい若いお方。君、君、おいなぜ返事せんか。無礼なやつだ君は我輩を知らんか。わしはねイーハトヴのタイチだよ。イーハトヴのタイチを知らんか。こんな汽車へ乗るんぢやなかつたな。わしの持船で出かけたらだまつて殿さまで通るんだ。ひとりで出掛けて黒狐を九百疋とつて見せるなんて下らないかけをしたもんさ』

こんな馬鹿(ばか)げた大きな子供の酔どれをもう誰(たれ)も相手にしませんでした。みんな眠るか睡(ねむ)る支度でした。きちんと起きてゐるのはさつきの窓のそばの一人の青年と客車の隅(すみ)でしきりに鉛筆をなめながらきよときよと聴き耳をたてて何か書きつけてゐるあの痩(やせ)た赤髯(あかひげ)の男だけでした。

『紅茶はいかゞですか。紅茶はいかゞですか』

白服のボーイが大きな銀の盆に紅茶のコツプを十ばかり載せてしづかに大股(おほまた)にやつて来ました。

『おい、紅茶をおくれ』イーハトヴのタイチが手をのばしました。ボーイはからだをかゞめてすばやく一つ

を渡し銀貨を一枚受け取りました。

そのとき電燈がすうつと赤く暗くなりました。

窓は月のあかりでまるで螺鈿（らでん）のやうに青びかりみんなの顔も俄（にはか）に淋（さび）しく見えました。

『まつくらでござんすなおばけが出さう』ボーイは少し屈（かが）んであの若い船乗りののぞいてゐる窓からちよつと外を見ながら云ひました。

『おや、変な火が見えるぞ。誰（たれ）かかがりを焚（た）いてるな。をかしい』

この時電燈がまたすつとつきボーイは又

『紅茶はいかがですか』と云ひながら大股（おほまた）にそして恭

しく向ふへ行きました。

これが多分風の飛ばしてよこした切れ切れの報告の第五番目にあたるのだらうと思ひます。

×

夜がすつかり明けて東側の窓がまばゆくまつ白に光り西側の窓が鈍い鉛色になつたとき汽車が俄にとまりました。みんな顔を見合せました。

『どうしたんだらう。まだベーリングに着く筈(はず)がないし故障ができたんだらうか。』

そのとき俄に外ががや〱してそれからいきなり扉（とびら）ががたつと開き朝日はビールのやうにながれ込みました。赤ひげがまるで違つた物凄（ものすご）い顔をしてピカ〱するピストルをつきつけてはひつて来ました。

　そのあとから二十人ばかりのすさまじい顔つきをした人がどうもそれは人といふよりは白熊（しろくま）といつた方がいゝやうな、いや、白熊といふよりは雪狐（ゆきぎつね）と云つた方がいいやうなすてきにもく〱した毛皮を着た、いや、着たといふよりは毛皮で皮ができてるといふた方がいゝやうな、ものが変な仮面をかぶつたえり巻を眼まで上げたりしてまつ白ないきをふう〱吐きながら大

きなピストルをみんな握つて車室の中にはひつて来ました。

先登の赤ひげは腰かけにうつむいてまだ睡(ねむ)つてゐたゆふべの偉らい紳士を指さして云ひました。

『こいつがイーハトヴのタイチだ。ふらちなやつだ。イーハトヴの冬の着物の上にねラッコ裏の 内外套(うちぐわいたう)と海狸(びばあ)の中外套と黒狐裏表の外外套を着ようといふんだ。おまけにパテント外套と 氷河鼠(ひようがねずみ) の頸(くび)のとこの毛皮だけでこさへた上着も着ようといふやつだ。これから黒狐の毛皮九百枚とるとぬかすんだ、 叩(たた)き起せ。』

二番目の黒と白の斑(ぶち)の仮面をかぶつた男がタイチの

首すぢをつかんで引きずり起しました。残りのものは油断なく車室中にピストルを向けてにらみつけてゐました。

三番目のが云ひました。

『おい、立て、きさまこいつだなあの電気網をテルマの岸に張らせやがつたやつは。連れてかう』

『うん、立て。さあ立ていやなつらをしてるなあさあ立て』

紳士は引つたてられて泣きました。ドアがあけてあるので室（へや）の中は俄（にはか）に寒くあつちでもこつちでもクシヤンクシヤンとまじめ腐つたくしやみの声がしました。

二番目がしつかりタイチをつかまへて引つぱつて行かうとしますと三番目のはまだ立つたまゝきよろきよろ車中を見まはしました。

『外（ほか）にはないか。そこのとこに居るやつも毛皮の外套（ぐわいたう）を三枚持つてるぞ』

『ちがふちがふ』赤ひげはせはしく手を振つて云ひました。『ちがふよ。あれはほんとの毛皮ぢやない絹糸でこさへたんだ』

『さうか』

ゆふべのその外套をほんとのモロツコ狐（ぎつね）だと云つた人は変な顔をしてしやちほこばつてゐました。

『よし、さあでは引きあげ、おい誰(たれ)でもおれたちがこの車を出ないうちに一寸(ちよつと)でも動いたやつは胸にスポンと穴をあけるから、さう思へ』

その連中はぎりぎりとあと退(ずさ)りして出て行きました。

そして一人づつだんだん出て行つておしまひ赤ひげがこつちへピストルを向けながらせなかでタイチを押すやうにして出て行かうとしました。タイチは髪をばちやばちやにして口をびくびくまげながら前からはひつぱられうしろからは押されてもう扉(とびら)の外へ出さうになりました。

俄(にはか)に窓のところに居た帆布の上着の青年がまるで天

井にぶつつかる位のろしのやうに飛びあがりました。ズドン。ピストルが鳴りました。落ちたのはたゞの黄いろの上着だけでした。と思つたらあの赤ひげがもう足をすくつて倒され青年は肥(ふと)つた紳士を又車室の中に引つぱり込んで右手には赤ひげのピストルを握つて凄(すご)い顔をして立つてゐました。

　赤ひげがやつと立ちあがりましたら青年はしつかりそのえり首をつかみピストルを胸につきつけながら外の方へ向いて高く叫びました。

『おい、熊(くま)ども。きさまらのしたことは尤(もつと)もだ。けれどもなおれたちだつて仕方ない。生きてゐるにはき

ものも着なけあいけないんだ。おまへたちが魚をとるやうなもんだぜ。けれどもあんまり無法なことはこれから気を付けるやうに云ふから今度はゆるして呉（く）れ。ちよつと汽車が動いたらおれの捕虜にしたこの男は返すから』

『わかつたよ。すぐ動かすよ』外で熊どもが叫びました。

『レールを横の方へ敷いたんだな』誰かが云ひました。

氷ががりがり鳴つたりばたばたかけまはる音がしたりして汽車は動き出しました。

『さあけがをしないやうに降りるんだ』船乗りが云ひ

ました。赤ひげは笑つてちよつと船乗りの手を握つて飛び降りました。

『そら、ピストル』船乗りはピストルを窓の外へはふり出しました。

『あの赤ひげは熊（くま）の方の間諜（かんてふ）だつたね』誰（たれ）かが云ひました。わかものは又窓の氷を削りました。

氷山の稜（かど）が桃色や青やぎらぎら光つて窓の外にぞろつとならんでゐたのです。これが風のとばしてよこしたお話のおしまひの一切れです。

底本：「新修宮沢賢治全集　第十三巻」筑摩書房
　　１９８０（昭和55）年３月15日初版第１刷発行
初出：「岩手毎日新聞」
　　１９２３（大正12）年４月15日
※「ウヱスキー」と「ウヰスキー」、「眠る」と「睡る」の混在は底本通りにしました。
入力：マイマイマイ
校正：小林繁雄
２００５年２月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。